

金城 圀弘さん

1938(昭和13)年10月30日生まれ

民間人

戦地 高嶺村字与座(現糸満市)



●与座部落の焼失

日に日に空爆がある。死体に最初は埋葬したり、かますを被せたりしていたが、日増しに数が多くなって散らかしどうしようもない。沖縄は雨季に入り、腐り膨れ上がってきます。栄養失調で痩せた人間でも風船のように膨らみません。それがすぎると臭いが凄くて、表せない。初めは点とか線で表せるけど、日増しに死体が多くなって、面に拡がってある。道は殆ど死体で埋め尽くされる。死体を除けて歩くんですが、たまに死体に足をつっ込みます。田んぼの中に足をつっ込んだような状況で、入ってそれを抜くと一緒にウジが付いて来る。ウジはチクチクする。

70軒ぐらいある与座部落も焼夷弾で全焼する。可燃性の液体が撒かれ、あとで5~6発の焼夷弾が落とされます。焼夷弾は子爆弾に分かれゼリー状の火の塊になって散らかっていく。だから5~6発で70軒ぐらいの部落は焼失するわけですね。母や姉や弟は防空壕に行きましたが、祖母と兄は、焼け残った廃材を使いまして、トタンの戸で仮小屋を作っていました。

昼は空爆、夜は艦砲射撃。夜になりますと閃光弾があがり無差別に艦砲射撃が来るわけですね。6歳ぐらいの足で防空壕から祖母のいる仮小屋まで10分ぐらい。その間でも破片を拾いました。爆弾から飛散した破片は、火傷するぐらい熱いんです。これを拾います。昼は屋で機銃掃射されたあとに葉きょうがバラバラと落ちてきます。それも拾います。当時はあらゆる物資を戦闘用にと供出します。鉄製の破片や真鍮の葉きょうを持って行けば、大人に褒められるだろうと、子供心に戦争の中に入っていました。しかし、運良くそれには当らなかった。

●1945(昭和20)年6月5日ごろ 安全な場所を探し、一度部落を離れる

親族15~16名で相談して、付近は全部戦争の真っ只中。もう少し安全な場所と大里部落に向うんです。その時も容赦なく艦砲射撃が降って来る。雷と同じでヒューパンは近いんですね。ヒューパンなら、すぐにみんな砂利道に這うんです。

国吉(くによし)部落に着きます。近くにあった焼け残った農家に水がめがあって、水がめの水を、私の兄がひしゃくを取って飲もうとした時に、部落のおじさんが「わらば(子供)は後だ」とそのひしゃくを取り上げて、そのおじさんがひしゃくをかめに入れたか入れないかの瞬間に、破片が来て脇腹をやられています。

私と2歳上の親戚のS君と馬小屋の天井で遊んでいました。突然われわれから1~2mのところに爆弾が落ちました。爆弾だと思うんです。今まで真っ暗な状態が青天井です、屋根裏が吹っ飛んじやって。下にいた親子連れも影も形もなく吹っ飛ばされているんです。1~2mの距離にいて、私とS君は無傷なんです。着弾した時に爆風は八の字に開くんでしょね。近くても遠くてもバーンといっちゃったかもしれない。S君のお母さんは胸に小さな破片が当たって死にました。

●1945(昭和20)年6月13日 “捕虜”になる。祖母の焼身自殺

どうせ死ぬんであれば自分の生まれたところに行こうということで与座部落に帰った。

姉が外で靴音がするという。皆押し黙っていた。フル装備の米軍が銃剣でトタンをぱっと開けた。東の空から光がぱあ~と入った。目がくらむぐらいの眩しさ。「出て来い」って言うわけだけど、当時は鬼畜米英で怖い。誰も出ません。しかし、1人出、2人出。アメリカ兵は1人でした。

アメリカ兵が最初にしたのは、腰に下げていた水筒を出して、われわれに「飲め」って言うわけですよ。しかし誰も、死んでもいいと思ってる、死になさいという教育なんだけど、毒じゃないかと飲まない。彼は自分で一口飲んでみせて、われわれにやったわけです。喉が渇いているから我先に飲んだんですけどね。

その人に連行されて下ります。その付近にも死体がいっぱい、うんうん唸っている人もいます。仮小屋には避難民のお母さんがいたらしく、その仮小屋はぼんぼん燃えていました。小屋の周りには子供が「んまんま」と泣き叫んでいました、しかしどうすることも出来ない。

そこから15mぐらいのところに、私の祖母と兄が以前いた仮小屋があって、さかんに燃えておりました。建物とかなんとか火炎放射器で焼いていくわけです。瞬間に、私の祖母は燃え盛る自分の仮小屋に飛び込み、焼身自殺するんですね。われわれに一言も言いません。とにかくアメリカの捕虜になるなら死になさいと教えられていたわけですね。一言も私、聞いてないです。死ぬんだとかね。

(取材日:2012年11月29日)